

牛 鬼

祭礼用練り物(牛鬼)(標本番号H37058、高さ/430cm 幅/240cm 奥行/440cm)

笹原 亮二 (ささはら りょうじ)

本館民族文化研究部

牛鬼は、愛媛県の南部、宇和島や大洲などの南予地方の祭りではおなじみの存在で、牛鬼が出る祭りは一五〇カ所にもほる。宇和島の宇和津彦神社のように、一カ所でたくさん牛鬼が出る祭りもあるので、南予全体でどれくらい数の牛鬼がいるのか見当もつかない。竹の骨組みを赤い布やシユ口で覆ったドンガラとよばれる胴体、長い首の先には鬼ともウシともつかない恐ろしいな形相の頭、剣型の尻尾をもった牛鬼は、一〇〜三〇人ほどの子どもたちや若者たちによって祭りの際に担ぎまわされる。いつからこの地方の祭りに登場するようになったかは不明であるが、一八世紀の記録には既にその姿を確認できる。

牛鬼は、加藤清正が朝鮮出兵で敵を脅した、地元の領主が敵の退治に用いた、人びとが獣狩りに用いたのに始まるといった

さまざまな起源が伝わっているが、正体は今ひとつはつきりしない。人に悪さをする妖怪としての牛鬼ならば、『枕草子』や『太平記』を初め、西日本各地にも話が伝わっているが、南予の祭りの牛鬼とは大分勝手

が違う。祭りでは、牛鬼は御輿みこしの先導や露祓いのほか、大きな首を家々に突っ込んで悪魔祓いをおこない、徹頭徹尾、善い奴なのである。もつとも、かつてはつきあいの悪い家や祝儀をけちる家には尻尾を突っ

込んでガラスを割ったりしたというから、「徹尾」とはいえないかも知れないが。

とはいえ、この顔は恐い。じつはこの顔は、戦後宇和島の張り子職人が考案し、瞬く間に広まったものという。それ以前はもつと牛っぽい穏やかな表情であったらしい。まあ、このくらいのはうが、露祓いや悪魔祓いの威力がありそうので、頼もしい気がしないでもない。



牛鬼・蛇形・絵馬